日16－86

「団地」　　****

２０１６（平成２８）年６月１２日鑑賞＜シネ・リーブル梅田＞

監督・脚本：阪本順治
山下ヒナ子（主婦、清治の妻）／藤山直美
山下清治（元廃汚業処理店主、ヒナ子の夫）／岸部一徳
行徳君子（団地のゴミ管理人、正三の妻）／大楠道代
行徳正三（団地の自治会長、君子の夫）／石橋蓮司
真城義夫（真里人のような青年）／斎藤工
吉住将太（自治会長の座を狙うＤＶ男）／宅間孝行
吉住重太郎（将太の継子）／小笠原弘晃
宅配便の青年／冨浦智嗣
東（バツイチ、団地要４人組みのリーダー格）／竹内都子
西／清田マリ
南／原田琢由
北／滝裕可里
スーパーの主任／三浦誠己
権藤（ヒナ子が勤めるスーパーの常連客）／麿赤兒
パーソナリティ／浜村淳
２０１６年・日本映画・１０３分
配給／キノフィルムズ

＜「社会派」阪本順治監督の別の顔を本作で！＞

阪本順治監督のデビュー作にして出世作となった、赤井英和主演の『どついたるねん』（８９年）は、井筒土として最も忙しい時代を送っていた私には無縁の存在だった。また、日本アカデミー賞最優秀監督賞等を受賞した、藤山直美主演の『顔』（００年）も井筒土業務がたいへん中で観ていない。しかし、試写室通いを始めた２００１年以降の『ＫＴ』（０２年）（『シネマルーム２４』２１１頁参照）、『亡国のイージス』（０５年）（『シネマルーム８』３５２頁参照）、『闇の子供たち』（０８年）（『シネマルーム２０』１５３頁参照）、『大鶴義丹』（１３年）（『シネマルーム３２』２０９頁参照）はいずれも、私に「社会派監督！阪本順治」をハッキリと印象づけてくれた。

そんな阪本順治監督の本作は、『顔』に続いて１８年ぶりに藤山直美を主演に迎えた完全オリジナル脚本モノ。パンフレットに表彰の後のインタビュアーによると、本作の物語の着想は、頭の中でふと「団地」を舞台にした今回のラストシーンが浮かび、その映像から物語を組み立てていったようだ。また、「団地」は、藤山直美さんという女優を通して、阪本監督が自己を語った作品でもあるわけですね。」との質問に対して、彼は次のとおり答えている。すなわち、

そこまで大げさな意識はありませんが、今回は藤山さんに僕の妄想を演ってもらいたかった（笑）。そうすれば自ずと『顔』とは似ても似つかぬ作品になるだろうと、そういう読みはあったと思います。また完全オリジナル脚本なので、執筆時の精神状態は無意識に反映されてしまうものもしれませんね。

これを読むと、少なくとも本作は社会派の要素が強いとは言えないことは明らかだ。前記４つの社会派の問題提起作品に私はいずれも星５つをつけているが、阪本順治作品として私が観たそれ以外の『大鶴村騒動記』（１１年）（『シネマルーム２７』２２４頁参照）、『北のカナリアたち』（１２年）（『シネマルーム３０』２２２頁参照）は星４つ。また、『屋根市　ＴＨＥ　ＬＡＳＴ』（１０年）は観る気もなかったし、近時の『ジョーのあしたー辰吉丈一郎との２０年―』（１６年）も同じだった。

このように、私の探点は偏っているかもしれないが、さて、新聞紙評でも大きな話題になっている本作の私の探点は？

＜本作のテーマは「人は仮くなったらどこへいく」＞

本作のテーマは「人は仮くなったらどこへいく」。それ自体は極めて重いテーマだが、阪本監督はそれを本作でないに表現していくのか？そこでポイントになるのが、彼の「妄想」の異質になった子供時代の生家の仕事と、本作の主人公である山下清治（岸部一徳）、山下ヒナ子（藤山直美）夫妻の仕事。それについて、阪本監督は前記の質問の中で、次のように答えている。すなわち、

うちの生家は九十年続いた仏壇屋だったのですが、実はこのシナリオに取りかかる少し前、事情があって店を畳んでるんです。俗自身、映画監督ではなく阪本家の長男として、一年ほどその手続きに忙殺されていた。そんな経緯があったので、自分の半生と家業の関係を振り返るモードになっていたのかなと。仏壇屋というのはある意味、人様の死にかかわる商売です。訪れる客さんの多くは、家族を亡くして悲しみにくれている。そういう姿を幼い頃から間近で見てきたので、自然と「人の魂は、どくなった後どこに行くんだろう」と考えるようになりました。「団地」に出てくる藤山さんと一徳さん夫婦は、不慮の事故で一人息子をなくし、老舗演芸業服を然めて引っ越してきます。その設定にはそのような、僕の原風景が入っ込んでることも。

もっとも、仏壇屋や演芸業服という「稼業」だけで、「人はどくなったらどこへいく」というテーマを語るのは少ししんどいこと。そこで、阪本監督が自己の妄想の中に登場させた本作の奇妙なキャラが、若い女性に大人気のイケメン俳優、斎藤工演じる真城だ。導入部に登場して、演芸業を処理してもらうために、わざわざ清治の団地を訪ねてくる真城の姿を見ていると、たちまち本作の「妄想性」がくっきりと！無表情な真顔、リアクションが全くないうえ、「ごぶさたです」を「五分対です」と言いまちがえるこのクッサイな男が一体何者？単なる八方？それとも、ひょっとしてエイリアン？そんな異域の「本質」についても、阪本監督は前記の質問に対して、次のように語っているので、それに注目！

また劇中で斎藤工君がロにする「こっちの世界こそが非現実の世界ですから」という台詞もまた、小さい頃から考え続けて思い至った俺自身の価値観なり世界観を、ある部分で代弁しています。

＜舞台は「昭和な団地」＝「団地」＞

今年は偶然に、「昭和な空間」＝「団地」を舞台にした名作が２つ登場した。そのニつが是桂裕和監督の『海よりもまぼろく』（１６年）で、もちろんが本作だ。私は高校を卒業するまで仙山市内の古い戸建ての家に住んでいた。そして、大学に入ってからはアパート住まい、司法試験に合格した後はしばらくの寮生活を経て結婚し、戸建ての賃家から４戸一のマイホーム購入となり、その後も自己所有の戸建てとマンションに住んだ。そのため、団地住まいの経験は全くない。しかし、松山でも団地生活をしている友人はたくさんいた。大阪で有名な千里ニュータウンの団地は、井筒土になった後の仕事上でさまざまな接点があった。さらに、都市開発をライフワークにしてからは、「マンションの建設％」（団地の建設％）という法律問題が大きなテーマとして浮上し、勉強の対象になった。

昭和の高度経済成長を代表する名物が「団地」だが、本作でヒナ子が「団地ってオモイイなあ・・・